

居場所のつながりを地域へ

「実家の茶の間・紫竹」終了プログラム ②

I basho Japan 代表
千里ニュータウン研究・情報センター事務局長

田中 康裕

地域における助け合いの拠点

「実家の茶の間・紫竹」から教わったこと

6月24日、「実家の茶の間・紫竹」を訪問しました。

これまでに何度か訪問の機会がありました。そのたびに新たな気づきをいただきました。

◆「助けること」「助け合うこと」

「ここにはサービスの利用者はひとりもない。いるのは『場』の利用者だけ」

「実家の茶の間・紫竹」（以下、「紫竹」）で大切にされている言葉ですが、今年6月に訪問したときに目にしたのも、まさにこの言葉通りの光景でした。昼食の配膳を手伝う、お知らせを掲示する、昼食の食材を買い出しに行くなど、それぞれにできることで運営に関わっている方々。当番は台所以外ではエプロンを外すため、茶の間で過ごしている方々の中でどなたが当

番なのか、お聞きするまで分かりませんでした。

「自分はもう歳だけど、ここでは必要としてもらえる。自分はここで成長したし、他の人もそうだと思う」。

月に何度か当番を担当されている方から、このような話をうかがいました。何歳になっても誰かに頼りにされている、誰かの役に立てている、という手応えを持っていること。何歳になっても成長できたと思えること。人が尊厳を持って生きるとは、このようなことなのだと思われました。

今、さまざまな場面で「地域における助け合い」の必要性が議論されています。しかしその議論は、暗に「助ける側」と想定される人だけによってなされている可能性はないか。弱い立場の人をどう助けるかという議論になっている可能性はないか。もしそうであれ

ば、それは助けるための議論であって、助け合いのための議論ではない。弱い立場の人を助けることが重要なのは言うまでもありませんが、助けることと助け合うことは違うことを、紫竹の光景は表しています。

助け合いとは、自分が相手を助けると同時に、自分が相手から助けってもらうこと、そのような可能性を想像できること。そのためには、自分から「助けて」と言えることが大切になる。だから、地域における助け合いの拠点として開かれた紫竹では、「助けて!!」
& 『助けて!!』
& と言える自分をつくる、『助けて!!』
& と言いつける地域をつくる」(「実家の茶の間・紫竹」終了に際してのプログラム予定入本誌6月号21ページ参照)ことが目的として掲げられているのです。

◆ 矩を越えない距離感

自分から「助けて」と言うのは、実は簡単ではない。だからこそ、紫竹ではこれが目的として掲げられているのですが、では、どういう状況であれば自分から「助けて」と言えるようになるのか。紫竹が示しているのは、相手との適度な距離感が大切にされるからというもの。このような距離感を、紫竹代表の河田瑋子

さんは「矩^のを越えない距離感」と表現されています。

助け合いとは、相手との距離を縮めて仲間になることで実現される、と捉えられることが多いかもしれませんが、もちろん、このような助け合いも大事。けれども、「地域における」という部分に焦点を当てるならば、矩を越えない距離感こそが大切である。このような考えの背景には、河田さんらによる30年以上に及ぶ助け合いの取り組みがあります。河田さんは、1991年に立ち上げた会員制の有償助け合い活動「まごころへルプ」について、次のように話されています。

「みんな、近所の人に来てもらいたくないんです。交通費がかかってもいい、どんな遠くからでもいい、全然知らない人に来てもらいたい、というのがすごく多くて。でもそれでは(地域における)助け合いにつなぐっていかないのです、まず私の家に来てもらいました。代表者の私が傷つかずに助けてもらえる仕組みであれば、広がっていくのが早いだろうと思って」

地域における助け合いとして想定されるものには、調理や掃除など家の中に入ってもらわないとできないことが多い。でも、同じ地域の人に片付いていない部

屋のことなどを見られ、地域に噂として広められるのは困る。だから、遠くから知らない人に来てもらいたい。プライベートを侵さない、他に漏らさないといった距離感が大切にされなければ地域における助け合いは実現されない、ということです。

このことを理解すれば、紫竹に掲示されている「その場にはいない人の話はしない」「プライベートを聞き出さない」という約束事も違った形で見えてきます。相手と仲間になることを目的とするならば、これらの約束事はよそよそしいものに見えるかもしれませんが。しかし紫竹では、仲間になることでなく、矩を越えない距離感を大切にする関係を築くことが目指されている。このような関係は、かつての地域に存在したと言われる濃密で抑圧的なものでない。重要なのは、紫竹は「昔に戻れ」と主張しているのではなく、新たな形の関係を築くことが目指されていることです。90年代に河田さんが創設し新潟市内に広がった「地域の茶の間」の「地域」には、「社会性のある茶の間」という意味が込められています。紫竹でお会いした方は、「社会性というのは他者との距離感のことで、紫竹は

多様な距離感を持つ他者との関係を、それぞれがつくり直していく場所だと思う」と話されていました。

◆究極の居心地

助け合いのために、なぜ居場所が必要なのか

地域における助け合いが大切だとしても、それが一人歩きしてしまえば、人は「役に立つかどうか」という有用性で判断されてしまうおそれがあります。これに対して紫竹では、「人は、いるだけで尊いのだ」というさらに深いところが追求されています。これを表現する場所のあり方を表すのが、河田さんによる「大勢の中で、何もしなくても、一人でいても孤独感を味わうことがない『場』（究極の居心地の場）」という表現です。「ここは、大勢の中で一人でいられるのがいい」と話されていた方もいます。

河田さんからも以前、次のような話をうかがいました。

「奥様が亡くなられて一人になった方が、みんなが話してるときにテーブルにうつぶせになってるんですよ。その姿を見て、普通なら一人で孤独な姿と思うでしょ。『具合悪いですか？』って、そっと傍に座って聞いた



「実家の茶の間・紫竹」の日頃の様子

んです。そうしたら『いやあ、このにぎやかなのを自分は楽しんでいるんだ』って。子どもの頃、自分の家がこんなだったって。いっぱい親戚とか集まって、にぎやかで。『だから、みんなの話し声とかを味わっているんだ』っておっしゃったの」

究極の居心地を実現するために、紫竹では約束事の掲示、玄関、テーブル配置、訪れた人への対応、当番の気配りなど、数多くの配慮がなされています。これら一つひとつの配

慮は、「まごころヘルプ」から30年以上にわたって「現場から学ぶ、人から学ぶ」というプロセスを通してつくりあげられてきたものです。紫竹を視察する方の中には、「ここは特別なことをしていない」という感想を持つ方もいるとのこと。しかし、それが「何もしていない」という意味なら、紫竹での数多くの配慮を見落としているように思います。

究極の居心地の追求は、地域における助け合いのた

めに、なぜ紫竹という居場所が必要なのかという問いにも答えてくれているように思います。他者と関わることを強いられず、かといって、関わりが遮断されるわけでもないという「矩を越えない距離感」が大切にされる関わりは居心地がいい。このことを身をもって体験するために、紫竹という居場所に身を置くことが大切にされているのだと考えています。

紫竹のような場所を、どうすれば他の地域にも開くことができるのか。多くの人が知りたいであろうこの問いに対する答えを持ち合わせていませんが、一人ひとりの尊厳を大切にするという理念と、現場から学ぶ、人から学ぶという柔軟さ、大らかさ、そして、それによって理念をさらに豊かなものに育てていこうとするプロセスにヒントがあるように思います。

一人ひとりがそれぞれのやり方で、紫竹から教わったことを描いていくこと。その重ね合わせによって、紫竹を立体的なものとして描くことができれば、今年10月に運営を終了する紫竹の思いが、どこかで継承されるのに寄りできるかもしれない。この寄稿が、ささやかでもその一つのピースになればと願っています。